

第2章 大友氏遺跡の現状

平成28年度の「史跡大友氏遺跡整備検討委員会」設置以降における史跡整備、保存活用事業を中心に現状を述べる。

1. 史跡整備事業

史跡の公有化の現状 大友氏遺跡の保存の取組は、史跡指定以後、文化財保護とまちづくりの両面から史跡指定範囲や歴史公園予定地の範囲を拡張してきた。大友氏館跡として保護を要する範囲は46,000㎡もの広大な面積を持つ。公有化事業を進める中で、令和3年12月末段階で保護を要する範囲のうち、史跡として指定した面積は34,850.74㎡、土地の公有化面積は35,639.24㎡となり、全体の75%以上が指定・公有化されている。なお大友氏遺跡全体では、現在の史跡指定面積の合計は約9.5haである。

第1期短期整備（庭園整備） 平成24年度から28年度にかけて大友氏館跡庭園域の全体把握に向けて確認調査に着手した。大友氏館跡第23次・第25次・第27～34次調査と順次進めていき、園池の構造や自然科学分析により当時の植生環境などが明らかとなった。その成果を平成29年1月、発掘調査報告書（『大友氏館跡2』）として刊行し、同年8月、庭園域の整備工事に着手した。

整備面積は約8,000㎡、事業期間は平成28年5月から令和2年3月であり、その内、工事期間は平成29年8月～令和2年3月である。事業内容は、基本設計、実施設計、池造形、中島造形、築山造形、庭石設置、植栽、遺構表示、電気・機械設備整備などで、総事業費は4億6,846万円である。これらの業務は造園・土木・建築といった各部局の協力を踏まえて実施された。整備事業の詳細は令和3年10月に刊行した『国指定史跡大友氏遺跡 大友氏館跡庭園遺構整備事業報告書』に詳しい。報告書には庭園整備検討委員会の委員であり、仲隆裕氏（京都芸術大学教授 日本庭園・歴史遺産研究センター所長）による「大友氏館跡庭園の歴史的・文化財的価値」が掲載された。平成10年の庭園跡の発見から23年の歳月を経て、その歴史的な評価が示されたこととなる。

基本計画の改訂 平成27年度に策定した『史跡大友氏遺跡整備基本計画（第1期）』の策定後、短期整備を進める中で、整備の進捗状況などを踏まえて課題整理を行い、

整備基本計画を改訂した。この改訂版には、大友氏館跡中心建物等の復元整備や歴史文化観光拠点施設の整備に係る方針に加え、出土品の重要文化財指定など、新たに認識された諸課題を解決するための取組について盛り込んでいる。令和2年6月には、大友氏館跡において発掘調査で確認され、史料等で想定される建造物の適切な復元等を図るとともに学術的な指導及び助言を受けるため、「大友氏館跡建造物等復元検討委員会」を設置し、目下中心建物の復元検討を進めている。

大分市歴史的風致維持向上計画の策定 史跡整備に伴う計画とは別に、平成30年より本市都市計画部都市計画課と調整を進めてきた『大分市歴史的風致維持向上計画』が令和元年6月に策定された。後世に伝えるべき歴史的な風致^(iv)の重点地区の一つとして大友氏館跡を含む大友氏遺跡から府内城周辺一帯が、「新旧府内の祭礼にみる歴史的風致」に指定された。

本計画は、「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（以下、歴史まちづくり法）」に基づき策定されたもので、本市における歴史的風致の維持・向上を図り、守り育て、後世に継承するとともに、歴史的な環境を活かしたまちづくりを進め、市のブランド力向上による地域活性化や市民が地域に誇りを持つことができるまちづくりを目指すものである。策定にあたっては平成30年8月に法定協議会である「大分市歴史的風致維持向上検討協議会」を設置し、都市計画課による素案をもとに、種々の意見や助言などを踏まえて行われた。重点地区は歴史まちづくり法に基づき様々な特別の措置や国による支援が受けられる。この計画は地域で実施してきた祭礼を通じて人と史跡を結ぶ上でも、景観保全の観点においても影響力をもつ内容であ



図53 大分市歴史的風致維持向上計画（令和元年6月）

(iv) 歴史的風致とは、地域におけるその固有の歴史および伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物およびその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境。

り、また大友氏遺跡の意義や都市計画上の位置づけが、法律に基づいた計画において初めてなされたという意味でも画期的なものである。

2. 遺跡の活用事業の現在

文化財活用推進担当班の設置 平成30年4月、史跡整備班の業務の一部であった情報発信部門を独立させた「文化財活用推進担当班」が設置される。以後、大友氏遺跡を主軸にさまざまな情報発信事業を手掛けている。

南蛮 BVNGO 交流館の設置 平成30年9月30日、「大友氏遺跡体験学習館」に替わる大友氏遺跡の仮ガイダンス施設として、南蛮 BVNGO 交流館（以下、交流館）が開館した。「大友宗麟」「大友氏館跡」「南蛮文化」をキーワードに、宗麟公の生きた時代を体感できる施設となっている。体験学習を業務の軸としていた体験館に対して、観光客が訪れやすい施設となっており、工夫を凝らした展示や、迫力のある映像などで、大友氏遺跡や大友宗麟の功績をわかりやすく紹介している。交流館設置の検討は平成28年度より行った。経緯は、体験館の設置から9年目を迎え老朽化が著しく、維持管理に支障をきたしていた点、長らく「遺跡の発掘現場」であった大友氏館跡が、各種の計画策定を踏まえて、本格的な史跡整備が始まり今後は大友氏館跡を拠点とした情報発信施設が必要とされる点などから、当面の間、大友氏遺跡のガイダンス施設を大友氏館跡内に移設することになったことによる。現在、年間1万人を超える人々が来館し、大友氏館跡内に立地する利点を活かして年間を通じて幅広い層を対象にさまざまなイベントを実施している。令和元年8月には、発掘調査や『大友館と府内の研究』（24頁註(ii)参照）の研究成果などを踏まえて、「大友館 VR」を制作し運用を始めた。交流館で貸出しているタブレットや個人のスマートフォンを使って、広大な遺跡をめぐるながら大友館の姿を仮想現実映像として体感することができるようになっている。

FUNAI ジュニア検定と FUNAI ジュニアガイド 大友宗麟のイメージについては、その認知度の低さと、好感を持ってない人の多さに課題があった。特に中高年層には、大友宗麟に対して負のイメージを持っている人が多い。

そこで、若い世代に大友宗麟のことを広く知ってもらい、いち早く世界に目を向けた大友宗麟の業績をこれから先の世代に伝えていってもらうために、いくつかの取り組みを行ってきた。

平成25年に副読本（『6年郷土学習資料 府内から世界へ大友宗麟』）を刊行し、小学校6年生を対象として配布した。「大友宗麟」について、小中学生に学んでもらい、郷土への知識と愛着を深めてもらう目的であった。副読本は教科書に準ずることを意識して、字体の選択や、難易度、イラスト・写真のレイアウトを行った。その後、臼杵石仏のジュニアガイド活動に刺激を受けて、平成29年から FUNAI ジュニア検定及び、FUNAI ジュニアガイドの募集を開始した。検定を行うにあたっては、①「大友氏をはじめとする、大分の歴史を学んでもらう（若い世代への教育普及）」、②「郷土への愛着と誇りを持ち、その良さや魅力を語る力を育てる（郷土愛の向上）」、③「歴史・文化の薫るまちづくりへの意欲を高める（地域発展の活力）」、以上3つを主たる目的として開始した。現在までの受検者数は515人で、合格者（90点以上）は45人。これまでのガイド認定人数は21人で、令和3年度現在活動しているのは14人である。活動は主にイベントでのガイド活動がメインであるが、令和元年のラグビーワールドカップでは英語ガイドの研修を実施し、大分駅前にある大友宗麟公像前で外国人来訪者へのガイドも実施してきた。

ボランティアガイド組織の立ち上げ 基本計画を策定し、整備内容が具体化したことを受け、整備途上も含めた大友氏遺跡の魅力を市民の言葉で伝え、来訪者をおもてなしできる人材を育成する必要性が高まった。あわせて、平成30年度に開館する南蛮 BVNGO 交流館にて、整備中の庭園解説や館内ガイドを行うことができるよう、平成29年度より、ガイド養成事業を開始した。平成29年に1期生14名、平成30年に2期生10名、令和元年に3期生7名を養成し、現在30名が大友氏館跡庭園を中心にガイド活動を実施中である。1期生は大友氏遺跡や大友氏に関連した独自の活動を行っている団体の方々からの賛同者を募った。大友氏や遺跡についての見識が深い方々であり、2期生以降が使用するガイド教本

を1期生と共同で作成した。この教本は最新の調査研究成果を踏まえた90頁を超える冊子となり、令和2年には整備が完了した庭園の情報を盛り込んだ改訂版を作成した。

大友氏館跡庭園ガイド 大友氏館跡が魅力的な場として認識され、また次世代にその歴史的価値を繋げていくため、遺跡へ来ていただいた方へ次の3点が伝わるようなガイドを行っている。①大友氏の館はかつて約200m四方(約4ha)もの広大な敷地を持っており、足元にはその遺跡がそのまま眠っていること、②大友氏館跡庭園は、地中に埋まっていた遺跡であり、全国的に見ても希少な戦国時代末期の庭園を再現したものであること、③大友宗麟生誕500年にむけ、館全体の整備が進められていること。これらを通じて、多くの方が「また来たい場所」「誰かを連れて行きたい場所」となるようガイド活動を行っている。

情報発信コンテンツの強化 平成29年8月1日より「大友氏遺跡体験学習館」のFacebookを立ち上げ、大友氏遺跡に関する情報を広く発信できるようになった。体験館閉館後は「南蛮BVNGO交流館」の名称で日々様々な記事を掲載している。本書では十分触れることができなかった平成29年度以降のイベント履歴や大友氏館跡の整備状況を閲覧することができる。事業のアーカイブの観点からも重要であり今後も情報発信を進めたい。^(v)

その他の活動 平成30年10・11月は、第33回国民文化祭・おおいた2018・第18回全国障害者芸術・文化祭おおいた大会があり、「おおいた府内歴史絵巻800年」と題して、マンガやゲームに登場する武将をテーマに、著名な歴史学者や漫画家、歴史アイドルによる講演とシンポジウムを開催(巻頭図版15頁)。立ち上がったばかりのFUNAIジュニアガイドは遺跡解説や遊歩公園でのガイドなどを行った。また南蛮BVNGO交流館にてお茶会などのイベントを開催。国民文化祭にあわせて開館した南蛮BVNGO交流館でも各種イベントを実施した。令和元年は大分市がラグビーワールドカップ開催地の一つであったことから、交流館のインバウンド対応事業などを実施した。その後も大友氏遺

跡フェスタにおいて、音楽コンサートや庭園のライトアップの実施(巻頭図版15頁)や、各種シンポジウムの開催、ノベルティ製作やパンフレットの作成、各種広報媒体でのPR活動などを行っている。

3. 大友氏遺跡の価値の追加

重要文化財指定 大分県が調査した大友氏の遺跡から出土した遺物の一部が令和元年7月23日に重要文化財に指定された。史跡としての価値は整理されていたが、遺物の側からも大友氏が残した遺跡の価値が裏付けられたと言える。対象となったのは、大分県教育委員会が調査してきた館周辺の町屋(中世大友府内町跡)や旧万寿寺跡などの寺院跡等からの出土品1269点である。平成11年から17年間にわたる大分県教育委員会主体の発掘調査で出土した、主要な遺物で構成され、「土器・土製品、木器・木製品、金属製品、骨角製品やガラス製品など、内容は多彩である。中でも鉛や青銅を素材としたメダイやガラス製品のコンタツなど、キリスト教信仰に関わる遺物は注目される。また、中国・朝鮮・東南アジア産の陶磁器など、当時の幅広い交易や他地域との交流を示す遺物も多く、国際貿易都市として栄えた府内の様相を良く示す。大友氏治世下の都市の様相を良く示し、わが国の中世都市の実態を解明するうえで貴重な出土遺物である。」(大分県立埋蔵文化財センターHPより引用)と評価されている。

4. 新たな動き

協働まちづくり大賞 上記のように、平成28年度以降は、大友氏館跡の整備や南蛮BVNGO交流館の設置など大きな変化を迎えたが、地域との関係にも大きな変化があった。まず、平成30年、大友氏遺跡史跡ボランティアガイドの2期生を市報にて募集したところ、応募のあった10名中3名の方が顕徳町からであった。その年の養成研修を踏まえて令和元年には、南蛮BVNGO交流館の来訪者に対して、大友氏館跡や大友氏についてのガイドを行っていた。住民自らが遺跡をPRするようになってきた。さらに、大分市役所市民協働推進課が実施している「協働まちづくり大賞」の優秀賞に顕徳町内会が選ばれた。協働まちづくり大賞とは、住みよいまちづくりへの関心を高め、市民

(v) 南蛮BVNGO交流館Facebookはこちらから

 <https://www.facebook.com/oiota.otomo/>





図54 大友氏館跡での宗麟盆踊り大会（令和元年8月）南蛮BVNGO交流館イベントにあわせて同時開催



図55 町内会によるもちつき大会（平成30年12月）後方に整備途中の大友氏館跡庭園がみえる

協働のまちづくりを推進するため、自治会や町内会のほか、NPO 法人やボランティア団体等が行っている取組のうち、他の模範となる優秀なものを表彰する制度である。顕徳町は世代間交流をテーマに「三世代交流広場で生まれ変わる町内会」として受賞した。この三世代交流広場とは「大友氏館跡」

のことをさす。本市市民部市民協働推進課が作成した『協働のまちづくり大賞 事例集 令和元年度』には、以下のように記されている。顕徳町では、大友氏館跡が発見されたことにより、多くの住民が町内を去り、特に遺跡のあった3丁目では世帯数が386から139まで減少した。もともと住宅が建ち並ぶご近所付き合いの盛んな地域であったため、住民の心にぽっかり大きな穴があいたようだった。そこで、なんとか町内に賑わいを取り戻したいと、大友氏館跡で「もちつき大会」や「盆踊り大会」（「宗麟盆踊り大会」に改称）を行うなど町内伝統行事の会場を遺跡に移して実施。新しい住民も取り込みつつ、南蛮 BVNGO 交流館が整備されてからは互いの行事に参加したり、住民がボランティアガイドとして協力するなど顕徳町の一員としての仲間意識も高まっている。そして、「子どもの参加も増え、町内は明るさを取り戻した。以前とは住民層が変わっているものの、行事の賑わいをみると住民が地域を大切に思う気持ちは変わらず受け継がれているように感じられる。これからも交流の場をつくり、絆を深め、子どもを大切に、ふるさとに誇りの持てる町内会を目指して行きたい」と結んでいる（大分市市民部市民協働推進課 2019）。

その他にも、町内の方によって自主的に大友館内に花壇が整備され、毎日のように手入れされている。殺風景になりがちな遺跡の空間に彩りを添え、地域の方々の手で遺跡

が親しみやすい場所へと変わっている。長い年月を経て地域住民から、大友氏館跡があることが町の魅力と感じていただけようになり、遺跡と地域との関係性は、新たな段階を迎えている。

第3章 大友氏遺跡の今後

基本計画令和元年度改訂版に示された大友氏遺跡の整備計画の中から、遺跡の復元や活用事業の今後について記載する（将来計画の概要は巻頭図版 16 頁も参照）。

計画の期間 平成 27 年度から令和 15 年度までのおおむね 19 年としている。大友氏館跡は 1530 年に生まれた大友宗麟が 2030 年に生誕 500 年を迎えるのにあわせて、大友氏館跡では発掘調査成果を基に庭園以外の門や内部の建物の復元整備を行っていく。大友氏館跡・唐人町跡の史跡整備の完成・公開と、歴史文化観光拠点施設を含む便利施設の完成・公開が目標である。

遺構復元計画の内容 具体的には、発掘調査により遺構が確認された中心建物跡をはじめとする礎石建物跡などについて、立体的な復元を目指す。また、中心建物域で検出された塀などの遮蔽施設、井戸跡や区画溝、かわらけ大量廃棄土坑、砂利敷遺構などについても重要な構成要素として復元や表示を行うよう整備を検討する。大友氏館跡外郭域は、館の外郭施設であった築地塀、積土と溝からなる施設、門について復元整備を検討する。今後は築地跡の範囲、塀の位置や基底部幅・柱穴など構造の把握に努め、文献史料の「土圃廻屏」普請の記録とも照合し、外郭施設の復元整備を目指す。その他、唐人町跡は、発掘結果に基づき建物の復元整備を検討し、大友氏館跡西建物域においても遺構が良好に検出された場合は、建造物の復元を検討する。

復元された建物等の活用 整備が進捗した段階において、復元された建物等の活用については、大友氏館跡の規模や空間を来訪者に体感してもらうとともに、「当家中作法日記」等に記されている年中行事をリアルに体感できるよう努め、その建物が当時どのように使用されていたのかについて理解を促すようにする。戦国大名館で行われた年中行事の詳細が解明されている事例は少ないが、大友館では資史料が揃い研究が進んだことからそ

の再現が可能であり、大友氏や大友氏遺跡の魅力を発信する市民団体などと連携し、CGなどのデジタル技術も利用しながら再現していくよう努める。

情報発信 整備が進む大友氏遺跡を核とし、市民ひとりひとりが幅広い世代に対して大友氏の魅力を発信する広告塔となる取組を推進していく。具体的には、現在行っている南蛮 BVNGO 交流館を拠点とした大友氏遺跡史跡ボランティアガイド・FUNAI ジュニアガイドの活動の内容や機会を今後より広げていく。大友氏遺跡史跡ボランティアガイドについては、ガイド内容をより充実させるため、ガイドによる歴史講座の開設をおこない、大友氏遺跡全体のガイドを行うなど、知識の維持・向上をはかりつつ遺跡全域の魅力を手感できる幅を持ったガイド活動へとつなげていく。

また、大学や市民団体、他市町村との連携による事業も増えていることから、大友氏遺跡の整備に連動したまちづくりの推進及び地域振興、観光振興の活性化につながる活動を検討する。

観光客の来訪を促す取組として、民間旅行会社及び市・県の観光協会と連携して、積極的なプロモーションを進める。さらに、整備事業が長期にわたることから、整備過程についても積極的に公開し、整備に伴う発掘調査や整備工事の実施に際しても、来訪者が積極的に関与できるような体験型のプログラムを準備する。

学校教育との連携 大分の未来を担う子どもたちに、大友氏遺跡への理解と愛着の醸成を促すため、長期的な視野に立って学校教育との連携を図っていく。現在、市内全域の小学校6年生を対象に実施している社会科副読本『府内から世界へ 大友宗麟』を活用した授業を継続するとともに、郷土の歴史、とりわけ大友氏遺跡の価値に触れ学ぶ機会を提供するため、教育現場と連携したソフトプログラムの充実を図るものとする。これらの計画にあたっては、日常的に児童・生徒の指導に携わっている教育関係者等、学校側と連携を図りながら行うことが望ましく、学校が利用しやすい環境に配慮した整備を行う。本書を踏まえ、整備活用の基本目標である「南蛮文化発祥都市おおいの創造・体感・発信拠点」としての歴史公園整備に向けて、市民の皆様と連携しながら取り組んでいく。

おわりにー未来につなぐー

1. 大友氏遺跡の特殊性

本遺跡の特徴は、全国でも数少ない戦国期の大規模な都市遺跡であるとともに、現在も大分市の市街地中心部、すなわち都市部に位置する点にある。都市部の機能を維持するため設置された様々な都市インフラが遺跡の周囲に展開し、結果としてさまざまな機能との調整を要する史跡でもある。国道、JRに隣接し、中心市街地の一角における大規模な史跡整備は全国的にも異例であり、史跡の範囲決定や整備計画策定の折にも多様な検討課題がありその解決に努めている。

都市公園としての大友氏遺跡 第1章でもふれたように、本事業は史跡になる以前から、まちづくり事業の一環であるとの位置づけを明確にしてきた。大友氏遺跡を文化財として保存すると同時に、地域の歴史と文化を知り、魅力的で個性あふれる県都大分市の「顔」づくりに欠かせない資産であるという認識のもと、平成18年3月には大友氏館跡歴史公園として都市計画決定を行った。その後も、中心市街地における再開発事業との調整を図りつつ、史跡の範囲拡大と公有化事業を推進し、あわせて都市計画における都市公園の範囲の確定も進めている。その困難な条件を逆手にとって、大分のまちづくりの一環として遺跡を取り込み、現代都市と史跡との共存を図っている。

2. 20年のあゆみをふりかえって

平成13年に大友氏館跡の一部が国史跡に指定されて以来、史跡指定・公有化と発掘調査を進めるとともに、遺跡見学会やイベントを通じて、大友氏遺跡の普及啓発と情報発信に努めてきた。長期の事業であることから、結果として文化財課のほぼすべての専門職員が大友氏遺跡を調査するとともに、イベントでは専門職員、事務職員が隔てなく職員全員で関わりながら、20年間この場所を今につないできた。

価値の更新 遺跡の調査からくみ上げた情報は、ただちに活用や整備に必要な情報となるわけではなく、そこには必ず一定の研究が必要となる。20年のあゆみを振り

返ると、様々なイベントを企画し情報を発信し続けることができた背景には、遺跡の研究成果が常に更新されてきたからに他ならない。戦国期の城館遺跡として著名な、国史跡勝尾城筑紫氏遺跡（佐賀県鳥栖市）に関わる市村高男氏は「全国の研究者や城郭ファンから大いに関心と期待が寄せられ、2006年1月、国史跡勝尾城筑紫氏遺跡に指定されたが、10年あまり行政側からの調査・研究の成果はもとより、整備事業に関わる情報も発信されなくなり、しだいにこの遺跡に対する人々の関心が薄れつつあることを実感させられる。（中略）これまで、この遺跡の国指定のために尽力した多くの方々、ご理解を示された地権者のみなさま、途中で斃れた委員の方々、国指定後の整備と活用の実現に期待を寄せられている多くの市民の皆さまを裏切ることになってしまう。」との危機感から、あらためて遺跡の魅力を周知し、軌道に乗せるべく取組を行っている（市村 2019）。

一方、本市では平成8年の中世大友府内町跡の調査開始からこの20数年の間、極めて多種多様な研究がおこなわれ、一部には学際的な研究成果として全国、さらには国外に知られたものもある。こうした学際的な研究成果を、市民に分かりやすく伝えるべく、令和元年度の「戦国大名大友氏の館と権力」や令和2年度の「戦国大名と鉱物資源」などのシンポジウムが企画された。

今のところ、調査・研究を行い新たな情報を継続的に発信していくサイクルが機能してきたと言えるが、このサイクルが滞れば、いずれ人々の関心は薄れていく。市村氏の言葉は我々にとっても大きな警鐘である。「整備活用は、学術的調査の成果を踏まえて実施するものであり、広大な大友氏遺跡の場合は、調査研究を継続しながらその成果を段階的に整備活用に反映させる、長期的な仕組みづくりが重要となる」（『保存管理計画 第4章』）であり、調査研究が枯渇すれば、新たな情報発信も活用の視点も生まれにくい。自明のことではあるが、常にその価値を更新しながら、引き続き活きた情報を発信していく必要がある。

未来につなぐ そして、この情報発信は一方向的な流れで完結するものではない。学んだものを活かし、新たな問いを生みだしながら、インタビュー①の田北さんの言

葉が端的に示すように、まずはその情報を伝えること。「そして伝えたことをまた伝えてもらう」（30頁）必要がある。これは、「大友氏の歴史とつながり、そしてその価値を未来につなぐ」とも言い換えることができ、その行為の中に史跡の価値を未来へつなぐためのカギがある。そのためにも、調査研究は常に開かれたものでなくてはならないし、継続的な情報発信は必須である。

さらに、「伝える」という行為の先に必ず「疑問」も生まれてくるはずである。誰もが大友氏遺跡のさまざまな情報に触れることのできる環境を作り、伝える側にとどまらず、学んだものを活かし、新たな問いを設定し、自ら解決（研究）することが可能な環境を整えることも重要である。市民一人ひとりが発信や研究を継続することで、新たな価値が生まれ、大友氏遺跡が持続的に価値を更新していく場となると考えられる。

今後の展望 最後に、本遺跡をとりまく行政側の視点と市民の側から見た視点でこれまでの関係性を、図55に整理した。これを元に大友氏遺跡と地域との関係性についての展望を考えてみたい。

大友氏館跡は、その発見当初から個人や団体を問わず様々な方の保存への運動や熱意が向けられ現在もこれに支えられている。一方で、遺跡は土地と切り離せないという特性から、保存するにあたっては、必ずその所有者や居住者の遺跡に対する理解と協力が必要となる。よって、遺跡を残すという判断の先に、地域住民の方との様々な対話があり、平成18年には事業への反対看板の掲示という厳しい場面も生まれた。58～62頁のインタビューにもあるように、そのわだかまりは完全に消えたわけではないが、一方で、前章（53・54頁）に示したように、顕徳町の町内会にとって世代間交流ができる場として、遺跡が住民同士をつなぐという新たな関係も生まれている。20年の間、遺跡への様々な取組・働きかけを続けてこられた方々の熱意と、大友氏遺跡のために移転せざるを得なかった住民の方々の気持ちに報いるべく、私達は史跡を過去からの「贈り物」として未来へつなぎ、次世代の市民に「こんな素晴らしい場所を遺してくれてよかった」と言ってもらえる場所を創ることが必要である。

平成 22 年から市民との協働を模索し「大友歴史保存会」とのイベントを実施した。平成 28 年度からは「大友氏遺跡 史跡ボランティアガイド」とともに、大友氏館跡や南蛮 BVNGO 交流館でのガイド活動を行っている。ガイド活動だけでなく、自主的な勉強会やガイドとは異なるアプローチで遺跡を周知しようと演劇活動を行った

り、広大な大友氏館跡の敷地を清掃したりと多様な活動に発展してきた。インタビュー①の発言(29頁)にあるように、依然としてこの場所が大友氏館跡であることを知らない方も多

い。しかし一方で、平成 27 年度に実施した市内全域での無作為アンケートでは、大友宗麟の人物像と業績を知る人が 44.3% であったことに対し、令和元年度に行った同様のアンケートでは 50.4% と、少しずつではあるが、大友氏に関する情報の浸透を実感することができる。

人口 48 万人の中核市である本市において、大友氏遺跡は多くの市民が親しみをもって「わたしたちの大友氏遺跡」といえる状況ではない。今後は幅広い方が史跡に関わり、市民参画ができる場となるよう、様々な機会(例えば、史跡ガイド組織の拡大や大友氏遺跡の市民発掘など)を準備し、歴史的な意義のみに拘泥されない市民による遺跡の多義的な価値付けもあわせて行うことが重要となる。そして、2030 年には「わたしたちの大友氏遺跡」となった大友氏遺跡にて多くの市民の方々と

「(仮称)大友氏館跡歴史公園」の完成を祝うことができよう、事業を進めていきたい。史跡が一年を通じて賑わいが絶えず、人と人とを繋ぐ場となるよう、多くの方々と知恵を絞りながら情熱をもって次の 20 年をあゆんでいきたい。

年度	事業の画期	本書に関連する事業項目	市民(地域)の動向
平成 8 年度 (1996)	10 月	大友館推定地確認調査 巨石と多量のかわれけ発見	
平成 10 年度 (1998)		大友氏館跡第 1 次調査 庭園跡の発見 大友氏館跡第 2 次調査 大友氏館跡西端部の確認	地元住民が発掘作業員として調査に参加
	11 月	大友氏館跡ではじめての現地説明会 (1・2 次)	←700 人の来訪
平成 11 年度 (1999)	3 月	国指定史跡に向けての方向性出される	
	5 月	大友氏館跡現地説明会 (1・2 次)	←1000 人の来訪
		←9 月 様々な団体より遺跡の保存要望出される	
	11 月	大友氏館跡第 3 次調査～国庫補助事業による調査開始 大友氏館跡にかかる地元説明会の開催	
平成 13 年度 (2001)		8 月 大友氏館跡が国指定史跡となる	
	9 月	中世大友再発見フォーラム	
平成 14 年度 (2002)		3 月 『大友遺跡検討委員会報告書 - 大友遺跡群活用まちづくり検討報告 -』	
	8 月～	旧万寿寺跡の確認調査	
平成 16 年度 (2004)		大友氏関連フェスタ	
平成 17 年度 (2005)		3 月 旧万寿寺地区が国指定史跡となり、遺跡名称が「大友氏遺跡」となる 大友氏フェスタ 2005	
		3 月 『大友氏遺跡を活かしたまちづくり検討委員会報告書』	
平成 18 年度 (2006)	10 月	中世大友再発見フォーラムⅡ 大友氏館跡現地説明会 (17 次 中心建物跡)	←500 人の来訪
平成 19 年度 (2007)	1 月	大友氏館跡歴史公園 事業認可	事業への反対看板掲示される
平成 20 年度 (2008)	4 月	大友氏遺跡体験学習館開館 大友氏フェスタ 2008 (発掘 10 周年)	公有化進む
平成 21 年度 (2009)		大友氏館跡第 21 次調査 高級陶磁器の発見	
平成 22 年度 (2010)		1 月 『おおいた応援隊 大友歴史保存会』 発足	
平成 23 年度 (2011)			
平成 24 年度 (2012)		大友氏館跡第 28 次調査～庭園調査再開	
		12 月 『フェスティバスタリクス開催』	
平成 25 年度 (2013)		大友プロモーション事業開始	
大分市政 100 年事業	8 月	南蛮文化国際フォーラム「南蛮文化発祥都市宣言」	←1493 人の来訪
	2 月	クリシタン・南蛮文化交流協定協議会 発足	地域活性化事業① 宗廟公まつり (第 1 回)
平成 26 年度 (2014)		副読本刊行	地域活性化事業②
平成 27 年度 (2015)	3 月	『大友氏遺跡保存管理計画』策定	地域活性化事業③
	12 月	『大友氏遺跡整備基本計画 (第 1 期)』策定	
平成 28 年度 (2016)			
平成 29 年度 (2017)	6 月	大友氏遺跡整備検討委員会設置	庭園整備開始 都市再生整備計画① FUNAI ジュニア検定・ジュニアガイド募集 大友氏遺跡史跡ボランティアガイド発足
平成 30 年度 (2018)		<国民文化祭>	都市再生整備計画②
	9 月	南蛮 BVNGO 交流館開館	
	10 月	中世大友再発見フォーラムⅢ	都市再生整備計画③
令和元年度 (2019)		大友館 VR 制作	
	6 月	『大分市歴史的風致維持向上計画』策定	都市再生整備計画④ 顕徳町内会の協働のまちづくり大賞 優秀賞受賞
	7 月	大友氏遺跡重要文化財指定	
	3 月	『大友氏遺跡整備基本計画 (第 1 期) 令和元年度改訂版』策定	都市再生整備計画④
令和 2 年度 (2020)			庭園整備完成 供用開始 都市再生整備計画 2 期①
令和 3 年度 (2021)			大友氏館跡庭園遺構整備事業報告書刊行

図 55 事業年表

【インタビュー④】 顕徳町3丁目元自治委員さんからみた大友氏遺跡事業



御手洗さん

御手洗孝一さん（昭和6年（1931）4月生まれ）

紹介 昭和34年（1959）に顕徳町3丁目の大友氏館跡中心建物付近に転居されて以降、大友氏遺跡歴史公園整備事業に伴い、平成23年（2011）に移転されるまで半世紀以上の間、当地にお住まいでした。御手洗さんは、土地の公有化が始まった頃に顕徳町自治委員となり、10年間大友氏遺跡事業の委員会への出席や住民代表として行政との間に立たれ顕徳町の将来を見つめてこられた方です。

●長：今年度は平成13年（2001）に大友氏館跡が国史跡に指定されて20年を迎えます。大友氏館跡の歴史公園整備事業は長期に及ぶ事業であり、完成までにはもう少し時間がかかります。そのため今となっては、当時を知る方も少なくなり、事業主体である本市職員の世代交代も進んでいます。本日は、御手洗さんに当時のことをお伺いしたいと思います。

●長：これは昭和36年（1951）に撮影した顕徳町の航空写真（巻頭図版7）です。御手洗さんのご自宅も確認できると思います。昭和50年（1975）の写真（巻頭図版8）を見ると顕徳町3丁目全体に住居が立ち並んでいます。御手洗さんは、顕徳町3丁目の大友氏館跡地に最初期に来られた方ということになりますね。

御手洗さん：懐かしい。引っ越してきた当初、2丁目は家が多かったが、3丁目はまだ家は少なかった。

一大友氏遺跡の整備事業について

●坪根：遺跡が見つかった頃の流れとして、森産業が移転した後、平成8年（1996）に初めての遺跡調査が行われ、平成10年（1998）に大友氏館跡の庭園であることが判明。平成11年（1999）には国史跡として指定する方向性がだされます。平成10年（1998）には大友氏館跡にあった金池保育園で住民説明会を開催しました。

御手洗さん：我々にとってはまさに寝耳に水。立ち退かせてまで事業を始めて本当に費用対効果があるのかと思っ

た。この気持ちは、今でも拭えない。当時はたくさんの家があり、移転費用や発掘費用も含めて莫大なお金を投資する意義があるのか。当時の住民も同じ気持ちだったと思う。

●坪根：当時みなさんは顕徳町が終の住処と言われていました。全世帯に移転してもらい事業を進めましたが、行政が進めるからと悔しい気持ちもあったと思います。こうしたご苦勞をもとに現在があるということの後世に伝えていきたいと思います。

平成13年（2001）に史跡に指定され、これから用地買収がはじまります。御手洗さんには平成11年（1999）に発足した「大友遺跡検討委員会」にもご出席いただきました。

御手洗さん：大友氏館跡は国が指定したというが、市が働きかけないと出来なはず。そもそも市がどのような意図で事業を進めたのか。市にとって大きな財産になると思っていたと思うが、市の負の遺産になるのではないかという懸念が今でもある。移転に係る費用は国から補助金が出たとしても、元は税金。ここまで投資してどのような効果があるのかという思いは今でもある。私はぼつんと館を作るより、大友氏の山城である高崎山の山頂の眺望を良くして、大友氏の山城「高崎城跡」と高崎山自然動物園などの関連施設を結ぶ。例えばケーブルカーで「うみたまご」を繋いで、城跡まで行けるようなものにすればよいのではと思ってきた。顕徳町に作っても、始めは物珍しさで来ても将来的に観光客が来るとは考えられない。だとすれば負の遺産になるのではないか。高崎山の方が効果的である。最初から言っているがあまり耳を傾けてくれなかった。

●坪根：現在事業が大きく進み、御手洗さんのご懸念をなんとか払拭するのが我々の責任と考えています。例えば佐賀県の吉野ヶ里遺跡もたくさんの費用をかけて歴史公園という形で整備され今では観光客がたくさん来ています。

御手洗さん：遺跡に関心をもつ人には良いが、大方はちょっと珍しいということで一度は来ると思うが、将来的に観光客が持続的に来るかは甚だ疑問だ。

一大友氏遺跡の今後のあり方について

●坪根：吉野ヶ里も地元も国も県も様々なアイデアを多くの方からいただく中で、多様な取組をしているそうです。御手洗さんのように非常に大変なご苦勞をされ、その先にある

史跡公園なので、御手洗さんがおっしゃるように「作りまし
た」というだけで、あとは来たい人だけ来てくださいという
のではだめだと思います。

御手洗さん：まんじゅう屋が出るような場所になればと思う。

●坪根：そうですね。まんじゅう屋さんやお土産屋さんが
並ぶような史跡公園にしなくてははいけないと思います。今
回御手洗さんのお話を伺って改めて思いました。とにかくこ
の場所に賑わいをつくる。それも継続的に。我々はこれを
あらためて肝に命じないといけません。

一 公有化事業のこと

●坪根：用地買収については、住民の方が、様々な思いを抱
えながら、徐々に移転されていく、といった状況が10年近く
続きましたので、お気持ちにも相当なご負担があったと思
います。

御手洗さん：心労もあった。見知らぬ所に移転して行って、
生活が変わって亡くなったという方も聞いた…。当時の担
当者も立場的にいろいろご苦労があったとは思…。

●坪根：御手洗さんの大変厳しかった当時の思いを…今回
は冊子という形で思いを記録し、我々は後世に引き継いで
いきたいと思います。市役所の担当者も変わっていくとは
思いますが、そのお気持ちを受け継ぎながら、いつもお土
産屋さんが並んでいるような、そういったところにこの場所
をしていかないと、みなさんの思いに報いることができな
いと感じています。

御手洗さん：やる以上、そうやってもらわないといけません。

●坪根：その思いを伝えていかないと。市民、県民の皆さ
んにも市役所の職員にもその思いを伝えておかないといけ
ないと思えます。

御手洗さん：以前言ったことがあるが、事業が始まった当時、
顕徳町3丁目に大友館があるのは市役所の方も知らなかつ
た。「そんなことやっているの？」という状況だった。今で
こそ知れ渡っていると思うが。

●坪根：当時は、大分駅南の区画整理事業が進んでおり、
そちらの方が華やかだったからだと思えます。駅南の事業で
は当時河野光男さんが金池校区自治委員連絡協議会会長を
されていて、駅南でも移転事業でご苦労をされていました。
今回のお話を聞いて、2000年代の初めの頃の状況を改めて

思い出しました。

御手洗さん：思い出すと懐かしい。

●坪根：大変な時代でしたね。

御手洗さん：大変なときに自治委員になった。

●坪根：自治委員をされたのは大友氏館跡が国の史跡に指定
されて、移転がはじまるころでしたね。顕徳町3丁目に生まれ
ている方からも、どうしようかということで御手洗さんに様々
な、相談に来られたと思います。相当大変だったと思います。
印象的だったのが、いま大きなマンションが建っている場
所にあったスーパーのマルキョウのことです。当時住んでい
る方からはここが唯一のスーパーなのでここだけは歴史公
園から外してほしいという意見がありました。そして歴史公
園区域から外したという経緯がありました。

御手洗さん：今は無くなったが…

●坪根：結果としては無くなってしまいましたが、住民の方
からはマルキョウだけは公園に入れなと。

御手洗さん：生活の利便性から言うと必要だった。

●坪根：わざわざ町内から出て買い物に行く、ということには
ならないですね。何度も説明会をする中で、そんな話もあり
ました。地元説明会は、若宮八幡社の参集殿でも何度かやり
ましたね。元町公園計画を変更する間の説明会が一番大変で
した。元町公園自体は計画から外れ、大友氏遺跡の推定御
蔵場跡を国史跡として推定しましたが、それ以外の土地は計
画変更後に、ばたばたと開発があり大きく変わりましたね。

御手洗さん：当時は元町の付近に集団移転するという話も
あった。

●坪根：当時、御手洗さんは、顕徳町3丁目のコミュニティ
があり、それが壊れないようにいろいろと考えられていまし
たね。平成13年(2001)から平成24年(2012)頃の間は公有
化が進んだ時期でした。平成21年(2009)に大型マンションだ
ったグランドパレスが無くなり、それから加速度的に皆さんが移
転されていきました。

●長：当時(平成19年)、私は大友氏館跡の調査担当で、
御手洗さんのご自宅の裏を調査した際は、いろいろとご迷
惑をおかけしたかと思えます。平成19年頃の文化財課職
員のことは覚えていますか?当時文化財課で用地担当だ
った桑原治さん(現道路建設課参事補)とか。

御手洗さん：よく覚えている。

●長：桑原さんは、住民の皆さんとじっくり関係を作りながらお仕事をされていたのではないかと思います。

御手洗さん：よくしてくれた。

●坪根：当時買収して増えた空き地で桑原と草刈りしていると、御手洗さんの奥様からよく差し入れをいただいていたのを覚えています。

一史跡公園ができるまでの歴史を伝えるということ

●坪根：それにしても、50年お住まいだった土地を離れるにあたり、相当な決心がいったと思います。こうしたことを大友氏遺跡の歴史の一頁として後世に伝えていく仕組みを考えていきたいと思っています。また、現在は大友氏館跡のガイダンス施設として南蛮 BVNGO 交流館がありますが、最終的には正式なガイダンス施設を作らなければいけません。そこでは、大友の歴史だけでなく、史跡公園ができるまでの歴史も展示の大きな柱の一つにする必要があると思います。それをどう表現するのかは工夫がいると思いますが、後世に語り継いでいけるよう仕組み作りをしていきたいと思っています。地域のみなさんの苦勞があつての史跡であり歴史公園なので、「庭園ができた」「館の建物の復元ができた」それだけで観光に来て下さいというような歴史公園にならないよう、皆さんの思いを表現できる場にしていければと思っています。今、文化財課職員で一番若い職員が26歳なので、50年先には今を知る人は誰もいなくなります。50年、100年先にも伝えていけるような仕組みを考えたいと思います。

●長：こちらの航空写真をご覧ください。平成21年(2009)の空撮です(巻頭図版10)。まだ御手洗さんのご自宅があるかと思っています。こちらが平成29年(2017)の空中写真です(巻頭図版11)。8年後の写真ですがこの頃には金池保育園の建物しかない状況です。

●坪根：来年度には大友氏館跡の北東隅にある市道顕徳10号線(旧国道10号)がなくなります。またさらに雰囲気が変わると思います。

この航空写真を見ると、この数年の推定御蔵場跡周辺の開発速度がとても速いことが分かります。国道10号が拡幅されて大きくなったことも要因として挙げられると思います。

●長：このように、数年で町の風景はかわり、元の姿はす

ぐに分からなくなります。冒頭にもお話しましたが、大友氏館跡がかつてマンション数棟を含む、たくさんの住宅が密集する住宅地だったということを知らない職員がこれからは入ってくると思います。また、先ほど御手洗さんがお話されたご懸念については、我々の大きな宿題ですが、それだけの皆さんのご苦勞に見合う価値があるものだという事を伝えていきたいと思っています。御手洗さんの言葉を聞き、庭園の整備が完了して少しほっとしている我々の背筋が伸びる思いです。御手洗さんからの厳しいご意見を忘れないようにしたいです。

●長：現在、庭園が完成したということでコロナ禍ではありますが、日本中から見学に来られます。そして小学生、特に地元の長浜小学校や金池小学校の児童たちが遊ぶついでに立ち寄ってくれます。徐々にではありますけれども、この場所の価値や魅力が知られるようになってきており、ようやく賑わいを生む場が整い出したところだと思います。次は持続性と集客方法ですね。賑わいを作り、みんなの拠点になるようにしていくことが必要だと思います。

御手洗さん：大河ドラマで取り上げてもらうとか。

●坪根：それも賑わい創出のための方法の一つですね。

●長：武田信玄は山梨県民の誰もがよく知る英雄であり、シンボルだと言われます。大友氏もなりうる存在だと思います。大友氏は、大友宗麟をはじめとする歴代当主が200年以上も顕徳町にある大友館を拠点としながら大分県内そして九州全体に影響を与えました。こうした重層的な歴史と県内を超えた幅広いスケールで活躍した大友氏のことを、地元の人が自然に「ああ知っているよ」という風になって欲しいですし、「大分に来たらとりあえず大友氏館跡に行かない」となるようにしていきたいですね。

一 大友氏遺跡事業に関わった人々について

御手洗さん：坪根さんはもうすぐ退職ですか。当時は新進気鋭という感じだったが。

●坪根：当時は30代でした。

御手洗さん：そうか。今昔の感だ…。私もあとどれだけ生きられるか…。

●坪根：計画ではあと9年で大友氏館跡の整備が完了します。歴史公園完成のセレモニーには御手洗さんにぜひとも

出席いただきたい。

御手洗さん：なんとか前に進んでいる姿を見てみたいと思う。

●坪根：完成時には、建物が復元されて、広場ができて、拠点施設がある姿になります。9年はすぐですよ。

●長：平成8年(1996)に初めてこの森産業跡地を発掘した担当で、当時、再任用で65歳だった杉崎さんという方なのですが、現在90歳で、いまでもお元気にされています。先日当時のお話を伺ってきたのですが、ご本人にもあと9年で公園が完成しますからその際にはぜひお招きさせていただきますとお伝えました。この方が試掘調査で庭園の景石をみつめて、ここが大友館かもしれないというきっかけを作った方です。

●坪根：本当は一区切りとして庭園が完成した時に、オープニングセレモニーをする予定でした。その時に御手洗さんや杉崎さんには来ていただくつもりだったのですが、新型コロナウイルスの感染拡大で中止になってしまいました。ですので、歴史公園全体の完成の時にはぜひご出席いただきたいと思っています。

御手洗さん：なんとか…なんとか露命を繋ごう！

●長：ありがとうございます。JR日豊本線沿いに線路敷ボードウォーク広場もできましたので、ご自宅から大友館までいつでも散歩に来てください。

一再び顕徳町の公有化事業について

●坪根：この用地買収の事業の中で一番印象的だったのが、桑原とご自宅に伺ったときに奥様が涙を流されたことで…。

御手洗さん：「大友難民はどこに行く？」と言ってね。

●長：平成18年(2006)に皆さんで公有化事業についての反対看板を掲げられましたね。写真(45頁参照)にも納めさせていただきました。

●坪根：戸建ての方は、移転するのであれば、できるだけ顕徳町3丁目から近い場所で、というお話がありました。ご心労は相当なものだったと思います。

御手洗さん：ちょうどこのころ、敷地内にあったふとん店さんが移転を決めてね。

●坪根：あれからのことを考えるとあつという間…。今考えると…あつという間でしたね…。正確な数字ではないですが、全部で250世帯ぐらいの方に移転をしていただきました。

御手洗さん：そのぐらいだと思う。

●坪根：顕徳町3丁目自体は北側と西側の一部を残してすべて移転されました。

御手洗さん：顕徳町の1から3ある町内会の中で当時3丁目は一番戸数が多かった。そのほとんどが移転した。

●坪根：一つの町がほとんどなくなってしまうという…。

御手洗さん：小さな村なら消滅している。顕徳町の町内会全体では600世帯ぐらいあり、そのうち3丁目が半分。1・2丁目で150世帯ずつ。3丁目は人数にして、1200名ぐらいだった。

●坪根：お話は変わりますが、公有化で増えた空き地では庭園の場所を含めて、御手洗さんを中心に地域の方々がグランドゴルフをよくされていましたね。

御手洗さん：そういった意味では当時いろいろと便宜をはかってもらった。

●坪根：特に庭園の部分は平成10年(1998)に調査して整備するまで時間がかかりましたね。庭園の南側に日豊本線が通っていて、高架事業が終わるまで調査ができなかったの。

●坪根：当時線路の上を通っていた国道10号の万寿橋を撤去するときは夜間の工事でしたが見に行きましたね。

御手洗さん：私も夜見に行った。

●坪根：真夜中の電車が通らないときの工事でした。懐かしいですね。今現地にいっても線路の上に万寿橋が架かっていた景色は思い出せませんね。

一おわりに

御手洗さん：坪根さんには久しぶりにお目にかかったが、玉永光洋さん(元文化財課長)はどうしているのか？

●坪根：今年で70歳近くになるとはいますが、今は大友氏遺跡の史跡ボランティアガイドに登録されて大友氏館跡で活躍しています。お忙しいそうですが元気です。

●長：昨年、市道錦町長浜線の建設の際に行った発掘調査成果を記した看板を設置しました。この看板や来迎寺、万寿寺、若宮八幡社などを巡るまちあるきイベントをつい先週行ったのですが(11月20・21日)、玉永さんには2時間ぐらいお客さんを連れてガイドしていただきました。

先ほど、御手洗さんが言われたように、大友館は住宅地

の中にぽつんとあるのは確かですが、こうした遺跡があった場所や現在に残る大友時代の寺社などを巡ることで、大友氏館跡だけではないこの場所の魅力を伝えることができると考えています。こうしたまちあるきは、いま若い方にも関心が高く、今後もやっていきたいと思えます。本日はお話を聞きできて本当に良かったです。

●坪根：御手洗さんから話を聞いて、いろいろ当時のことを思い出しました。なんとなく覚えているつもりでも、その当時の感情というか、そのときの気持ちを言葉にするのは難しいですし、当然文字にも表現できない部分があります。今日御手洗さんにお会いして、当時の心情を思い出しました。これは100%言葉にできない。これを伝える術があるといいのですが。

御手洗さん：大友遺跡検討委員会では、当時大学の先生とか会長とかいろいろな方がいらっしゃったが今はどうしているのか。

●坪根：当時大学の先生をされていた方は、みなさん既に退官されています。今でも調査の指導や整備の委員会で、委員などをお願いしている先生もいらっしゃいます。当時まだ若かった先生です。今も年に何回か大友氏遺跡に来られています。

御手洗さん：懐かしいな。

●坪根：いろいろ思い出させていただきました。私からのお願いは、公園の完成の式典にはぜひご出席をお願いしたいということだけです。

御手洗さん：馬齢を重ねて待っています。

●坪根：可能であれば史跡に指定されてからの大変なご苦労について、その会場でお話いただければと思っています。ぜひそれをお聞きしたいと思います。

御手洗さん：そうありがたいものです。

●長：ぜひお願いします。本日はありがとうございました。

御手洗さん：ありがとうございました。ときどき坪根さんがどうされているかなと、思い出すことがある。

●坪根：おとし南蛮 BVNGO 交流館イベント（平成 30 年 8 月 10 日 南蛮 BVNGO 交流館 真夏の夜語り）の時に同時に開催していた顕徳町の盆おどり大会にお越しでしたね。

●坪根・長：また、いつでも大友氏館跡でお待ちしております。

本日は貴重なお時間ありがとうございました。

（聞き手 坪根・長 令和3年 11月 26日 インタビュー）



昭和30年代の顕徳町3丁目周辺（北より）中央の道路（国道10号）右手に後に発見される大友氏館跡が見える [大分合同新聞社提供]